＜ふくしまの10年・詩が生まれるとき＞
（13）被害を伝えたいんだ

東京新聞 2021 年 2 月 11 日 配信

亡くなった人への鎮魂「詩ノ黙礼」を一カ月半ツイッターで書き続けた後、和合亮一さん（52）は2011年5月25日に「詩の礫（つぶて）」を再開した。この日は原発から20キロ圏内の福島県南相馬市と富岡町の住民が、初めて一時帰宅した日だった。家にいるのが許された2時間、泣いただけで戻ってきた人もいた。

震災後、頭に浮かぶ言葉を次々投稿した「詩の礫」は、他の詩人や評論家から「これは詩ではない」「詩の被災だ」「詩のだだ漏れ」「人の不幸を題材にした稚拙な作品」などと酷評された。「震災を利用して有名になろうとしている」と言う人もいた。一方で文学者らは「もともと技術力のある詩人。そこへ向かう理由が、震災にも和合さんにもあった」と反発。新聞では賛否を並べた特集が組まれた。

和合さんは深く傷ついたが、これほどのことを経験して今、書かなかったらいつ書くんだと思った。以前は1，2ヵ月で書いた詩を即興で次々発信したり、目の前の震災に絶望や怒りをぶつけたり、作風は変わったかもしれない。でもどんなことを言われようと詩を書こうと思った。

そんな時、福島市の小学校5年生の男子児童の作文に出会う。原発事故の問題は、自分がお父さんやおじいちゃんになっても解決しない。だから先の世代の子に教えるため、今勉強したいとつづっていた。和合さんははっとした。これだけの被害にあったことを、自分は福島の人間として伝えたいんだと気付く。技法や作風ではない。自分の総力を挙げ、この震災を書こうと思った。

＜ふくしまの10年・詩が生まれるとき＞
（14）フクシマから福島へ

東京新聞 2021 年 2 月 12 日 配信

「詩の礫（つぶて）」は、震災直後からさまざまな言語に訳され、ツイッターで海外に拡散された。 2011年5月、和合亮一さん（52）はオランダでの東日本大震災追悼コンサートに招致された。和合さんは自分が招かれたことを心底驚いた。英語もままならない上、ヨーロッパも初めてだった。オランダでも震災のニュースが流れていた。前日の夕食会で和合さんの話の後、日本の駐在大使が声を上げて泣いた。母国への心配や不安、彼の苦しみを感じた。みんなが自国に置き換えて考え、痛みを分かろうとしてくれていた。オランダの人が、福島の町名まで知っているのに驚き、事の重大性を思い知った。

詩の朗読は日本語ですると決めていた。抑揚、テンポ、リズム…。自分の声一本で勝負しようと、全てを言葉に込めた。終演後、会場にいた人々が「言葉は分からないが、恐怖、悲しみが声から伝わってきた」「生きるエネルギーを感じた」と話すのを聞き、思いが届いたのを実感した。

その後も各国に呼ばれ、地鳴りがするほどの反響があるなど、言葉の力を感じる一方で、衝撃的なこともあった。フランスでは「FUKUSHIMA」というお好み焼き屋を見た。震災後、福島は「フクシマ」になり、いろいろな意味で有名になってしまったと寂しくなった。福島に帰っても誰にも言えなかった。

フクシマを福島、地元で言う軟らかい響き「ふぐすま」に戻せるのか。どうしたら子どもたちに福島を残せるのか。切迫した気持ちが、和合さんの中をぐるぐる回った。

＜ふくしまの10年・詩が生まれるとき＞
（15）祈り許された気がした

東京新聞 2021 年 2 月 13 日 配信

震災後、和合亮一さん（52）は、最後まで避難を呼び掛け津波で亡くなった宮城県南三陸町の職員、遠藤未希さん＝当時（24）＝の両親が、津波が押し寄せてきた時の映像を見ているニュースを見た。黒い波が押し寄せる中、防災無線で避難を促す声を聞き、お母さんが「まだ言っている、まだ言っている」とぽろぽろ泣いていた。多くの命を救った彼女の声を聞いた後、和合さんは南三陸を訪れた。

2011年12月6日は、オーケストラが演奏する大阪のホールと中継をつなぎ、多くの職員が津波で亡くなった南三陸の防災対策庁舎前で、和合さんは「詩ノ黙礼」を朗読することになっていた。

「南三陸。黒い波があらゆるものを奪っても、女性は必死になって、呼び掛けた。『高台へ、高台へ』……」

吹きすさぶ風の中で、和合さんは声を張り上げたが、声をかき消すほどの強い風雨。天気は何かに怒っているかのように荒れていた。予行演習はうまくいかなかった。失敗を重ねるにつれ、無力感に襲われた。自分の祈りは許されないのではないか。何もかも空虚に感じた。13回の失敗。だが読み通してやると臨んだ本番は、初めてオーケストラと最後まで共演できた。 朗読しながら感情が込み上げてくるのをこらえた。読み切った後、祈りを許された気がした。指揮者が泣いていた。

原発も震災も問題は解決していない。自分たちが取り残されていると感じる。小さな力かもしれない。でも祈りをやめない。和合さんは決意した。 ＝おわり （署名記事）